

Fontaine

nouvelle

vol. 26

発行日 2010年1月15日
発行/岸和田文化事業協会

〒596-0073 岸和田市岸城町5-10
岸和田市立自泉会館内
TEL/FAX 072-437-3801
Email:fontaine@sensyu.ne.jp
http://www2.sensyu.ne.jp/fontaine/

謹賀新年

新しい事の始まりは

会長 松本 則子



新しい事の始まりは、新しい物を初めて使うとき不思議な緊張があります。緊張感は不安感よりもはるかに期待感に満ちていますが。新しい年の初めも、毎年、今年こそはと期待に胸ふくらませ、張り切っています。

昭和20年代に子どもだった私は、大晦日の夜は枕元に新しいこぼりを置いて寝ていました。

元旦の朝は飛び切り上等な朝のような気がしていました。父も、母も笑っていたし、新しい洋服を着せてもらって（新しい着物でなく洋服です）、新しいこぼりを履いて、鈴の音をしゃらしゃら鳴らしてご近所を一周していました。出会った誰もが笑っていました。

昨日はあんなに怒鳴り、ののしり、子どもを追い掛け回していた人たちが、一夜明ければこんなに生き生きと新鮮になって、頭まで撫でてくれました。お正月というのは不思議なものだとあの頃からずーっと思

っています。

あの頃から半世紀経ちました。あの頃は洗濯機もテレビも、電話さえ庶民の家にはありませんでした。今は年賀状もパソコンメールで送ってくる友人もいます。携帯電話は一人一台、いや仕事用とプライベート用と二人二台持っている人もいます。

様変わりした生活環境。だけど正月はやはり新しい気持ちになることは変わりません。元日の朝はなぜかニコニコします。

変わるものと変わらないものと、守らなければならないものと変えなければならないものと、自泉会館という登録有形文化財に関わるようになって、このことをいつも考えるようになりました。

この美しい古い建物から岸和田の文化を紡ぎ出し、新しい文化を織り成していかなければならないと思います。今年も一年、みんなで素晴らしい文化という錦を楽しみましょう。

きしわだ昔話歳時記 第一話

「正平地蔵物語」

理事 藤田保平



正平地蔵さんて、知ってるかえ。今は南町の蛸地蔵さんの本堂の脇の地蔵堂に祀られちゃんやけどね、元はちゅうと小寺村、今の上町やのう、そこにあつたんやてよ。ほて、まあ、殿さんの時代にならうかえ、お城の中へ一旦移された、明治になってから蛸地蔵さんといひ祀られたちゅうこつちや。何で正平地蔵さん言うかちゅうと、その光背に「正平十七年 四月八日、願主本阿」と刻っちゃあるさかいや。正平十七年て言うたら南北朝時代の南朝の年号や。

それから二百年程経って日本国中、あつちやでもこつちやでも戦争ちゅう、毒どくしやう性な時代があつて、戦国時代て言うんやけど、日本国中強い者勝ちの時代やさかい、岸和田だけ例外ちゅう訳にはいかん。こゝらから戦いの渦の中ぢや。さ、そやけどね、その時分の百姓ら馴れてるちゅうたらおつかしけどよ、ぐずぐずしちやつて側杖食うたらどもならんさかい、戦になるなと思たら、ちやつと身の廻りの物まとめて山の池の端の方へ逃げ出すんじや。この時もちやつちやつと逃げ出したちゅう話しや。

さあ、いよいよ戦いが始まる。一方が攻めたら片方が逃げる、片方が盛り返したら一方が逃げるちよな工合で

両方の軍勢が毎日行ったり来たりで、そのたんびに火をつけて逃げくさるさかいに家も橋も小つちやな森まで丸焼にされてしもたんぢや。

こないに荒らされてんのに、どんなひょうしや知らんけど、藪のねきの正平地蔵さんのだけすつくり残つちやつた。ここに一人のお婆さんが居つてな、もとはこの地蔵堂のねきに家があつたんやけど、他の家と一緒に焼かれてしても、それからは、しやあないさかい、お地蔵さんのお守りをしもつてこのお堂に住んぢやつた。その日は朝から両軍の陣所がせわしないちゅうて隣の家の爺さんが山から婆さんを迎いに来たんやけど婆さんは「いらん」ちゅうて動かん。「このお地蔵さんは二百年も昔に、この世の中に戦いが無なうなるよにて願かけして造られたお地蔵さんや。今度の戦いも早しも終つて、元の穏やかな村になるよに、わいはお守りさいてもらう」ちゅうて動かん。隣の爺さん、やつきになつて「今まではうまいこと助かつたけど、今日は危ない、今のうちに逃げらなあかん」てすすめるけど「正平のお地蔵さんがついてくれてんや、別条べじょうない別条べじょうない、お前も山みたなどこ行かん」とこでいて、「逆さかに引き止める始末や。爺さん呆ぼれてしもて「ほなまあ好きすなよにせえ」て山へいん

でもした。

さあ、その後はえらいこつちや。両方の軍勢がワアワア言うての戦いや、どつちが勝つやら検討もつかん、その時、古城川を渡つて騎馬の一隊がお堂の脇を駈けぬけていく、そのひょうしにお堂に火付けくさつたんか、お堂が燃えだしたんや。「こゝらかなわん」と一旦は外へ逃げ出たんやけどお婆さん「お地蔵さん助けらな」て、夢中でお堂へ取つて返した。そやけどその時にやもうお堂は火の海。「正平のお地蔵さん、さあ逃げまひよ」おどろしのも適かなわんと、なんとわがの背丈程もある石のお地蔵さんを背負て外へ逃げだした。外へは出たけど、後ろでどんどんお堂が燃えてる、こゝらどもならんと向かいの竹藪まで引きずるよにして逃げた、逃げてお婆さんの着物にも火が付いて燃えてる。こんな時ちゅうのは「火事場のくそ力」やつとこすつと藪の中の棕せの木の根元までお地蔵さんを運んで、ほつとしたお婆さん、ひよいと見たらわがの着物焼けてポロポロ、そやのに火傷ひとつしてへん、こゝらどう言うこつちやる振り向いて見たら、なんと、お地蔵さんの右半身が真黒焦げになつて、目と鼻も口も判らんよになつてんじや、お婆さんびつくりして「お地蔵さん、わがの身みい、こないにしてまでわたいを助けてくれたんか」て言うてポロポロ涙流しもつてお地蔵さんの身体を撫なぜさすつたんや。その時にね、お地蔵さんがこつと笑わらろて「よかつたのう」て言うてくれたよに思おもつて言うこつちや。

「この世に戦のないよに」ちゅう願かけの錫杖を逆手に持つて、今でも優しいお姿でわがらを守つてくれてんや。ピッカラドンのポン。



理事
山田 広美

日々・隣にいた文化を 後世へ繋いでいきたい

昨年の春に夫の薦めで、岸和田文化事業協会の理事をさせていただき、気がつけば季節は秋も過ぎようとしています。

初めて定例総会に出席をさせていただいた時、自分が場違いの所にいる気がして、面映ゆく、まっすぐに総会に出席されている方々のお顔を見る事ができなかった記憶があります。

幼いころから、又学生の時から、そして子ども達を育て上げてから時間を見つけ、ひとつの事をやり続けてこられた方々が眩く・羨ましく感じ、今迄普通の主婦だった私に理事という役割がこなせるのであろうか？ 私は力不足では無いのかと自問自答を繰り返していました。

「文化」という二文字は意外と重く・難しく、調べると、「culture 社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体。言語・習俗・道徳・宗教、種々の制度などはその具体例。文化相対主義においては、それぞれの人間集団は個別の文化をもち、個別文化はそれぞれ独自の価値をもち、その間に高低・優劣の差はないとされる」(Wikipediaより) と書かれていますが、何となく解ったような、解らないような感じのままでありました。

そんな矢先に、岸和田市日韓親善協会の方達と、韓国を訪問させていただく機会がありました。今迄は観光・買い物といったように、あー楽しかった！で終わっていたのですが、今回は、地元韓国の方々と一緒の時間を過ごさせて

いただく事が多く、建物を見ても、食事をしていても、つねに日本と韓国との違いと、類似点を探す事のできた旅となりました。

理事となった事が面映ゆく感じていた私だったのですが、文化とは重たく考えなくても、例えば食事にしても日本独自の文化があり、日々の生活にも日本独自の文化があるように、私達が生きている中には様々な文化が有る事に気づかされました。日本という大きなブロックで考えなくても、大阪には大阪の！ 岸和田には岸和田の！ そして家庭には家庭の文化が有るといふ事に…。先人たちが残して下さった多くのものから感激をいただき、教えられ、今の自分が存在しています。そのことに感謝をしながら後世へと伝えていくことが私が理事になってできることだと…。分不相応であっても伝達は出来るということに誇りを持ち、理事の役割をさせていただこうと思っています。





理事

金丸 晏子

『熊野神社旧跡地』

岸和田市別所町 小さな宮あと

バタバタ小さな足音。「リス公園へ行くよ」「マーちゃんもいく」数人の幼い子どもたちが駆けてゆく。リス公園！リスの遊具があったらしく、いつの頃からか子どもたちの間でそのように呼ばれるようになった、と聞いている。今、もうリスはいない、壊れてしまったのだろう。その公園は我家の裏、別所町の外れで、熊野神社の宮跡と伝えられている所にある。

昭和21年春、終戦のまだ騒々しい頃、父を亡くした私たち母子五人は大和高田市からこの地へ移ってきた。その頃、辺りは田と畑ばかりの一軒家であった。少しの物音にもおののき外へ飛び出していたものである。裏が森で気味が悪く夜風など吹くと眠れないこともあった。この辺りが宮跡であることや我家がその一角にあることも、随分大きくなるまで知ることはなかった。そこには松の木が沢山あって少し小高くなっている。回りは低木や笹が生い茂り、ささやかな鎮守の杜であったのだ。奥にお稲荷さんの小さな社があった。その辺りには隣り村へ抜ける山道のような細い道があり、その道の曲がった所にお地蔵さんの叢祠があった。いつも紅い花が供えられていた。そのお地蔵さんは今、我家への三叉路の角にお祀りされている。

私たち子どもにとって宮跡は格好の遊び場であった。一番高い松に上ると海が見えると誰かが言った。海、それはその頃の私にとって憧れの一つでもあった。よく木に登り教えられた辺りを眺めたものである。すると、いつも近くのおばさんがやってきて大きな声で「また女の子が！」と叫んでは履物を我家へ持っていかれてしまった。その度に裸足で帰り、裏の井戸で足を洗ってはそと茶の間を通り抜け納戸で本を読んでいたものだ。

いつの頃だろう。あの大切な松の木は根こそぎ取り払われていた。細い田舎道もなくなって周辺が平らになっている。そして、あちこちにお粗末な遊具が置かれて小さな児童公園になっていたのである。そして、時がたつに連れて辺りは少しずつ田畑が住

宅に変わっていった。

公園の中心辺りに玉垣に囲まれた石碑がある。玉垣の西側に『文化三丙寅歳』と刻まれた手水鉢が、足もとを少し砂に埋れて置かれている。石碑には『熊野神社旧跡地』と彫られていた。後にまわると『七十二代白河上皇が熊野参詣の途中天変に遭遇、占人の告に依り此の地に熊野神社が拜造された。明治四十一年九月官命により元沼天神社に合祠された。その記念の為の碑を建立す 大正五年四月 別所町元氏子中』おおよそ以上のような文言が刻まれている。氏子中には宮座のような会があったのだろう。現在も旧友会と称して延々と受け継がれている。そして宮跡の清掃やその他の管理をされているのである。

平成21年6月の初旬、私は朝もやに包まれた何とも厳かな重々しい空気の中、早朝の熊野本宮大社を参拝する機会を得たのである。

参拝後、本殿の前で佇みながら、ふと我家の裏の熊野神社跡を思い描いていた。創建当時の本殿や拜殿を想像することはとてもできないが、でもご祭神は素戔鳴尊、同じ方なのだよねえ、一人納得している自分に苦笑していた。その宮跡にも季節が移ろい春になると細やかな参道の桜が見事に咲き競い、夏には地蔵盆のお祭りもあった。寒い冬の夜の松籟、翌朝、一面に落ちている松葉や松笠。半世紀以上も昔のことなどを私は今、静かな熊野本宮大社本殿の前で鮮やかに想い浮かべているのであった。

柱時計が五時を打った。幼い子どもたちの笑い声や泣き声、パタパタと足音。先程の子どもたちが帰ってきたのだ。少しずつ辺りが暗くなり冷えてきた。



『熊野神社旧跡地』石碑



陶芸家

加守田 章二

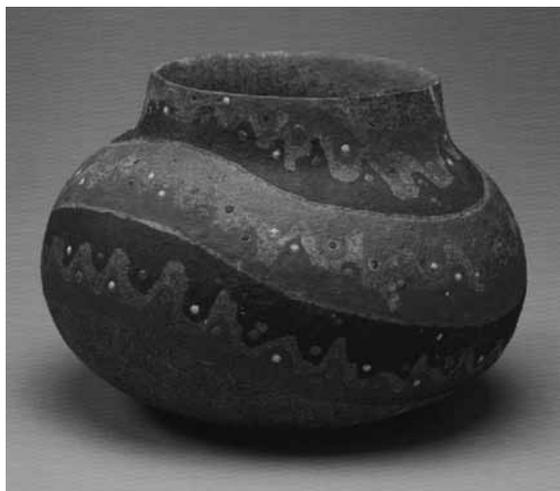
加守田さんは、吉井町で生まれ、岸和田高校を卒業後、京都市立美術大学工芸科へ入られました。そこで学長でもあった富本憲吉氏より陶芸の指導を受け、卒業の時に、陶芸は食えないから、他の仕事につくようにと憲吉氏みずからのアドバイスも無視して、日立製作所おのみか大甕陶苑の技術員となり石炭窯を焚きに行かれました。石炭窯は重労働で、質の悪い石炭で焼くのは苦勞でしたでしょう。

そこを飛び出し、転がり込んだ先は、みなさんも良く知っている“峠の釜めし”の器を焼く栃木県の益子町ましこの塚本陶器でした。明けても暮れても同じ作業ですが、しかしこの社長は、夜、自由に陶芸の本を見せ作陶もさせた所でした。益子で須恵器の窯跡が見つかったのも何かの縁で、加守田さんの須恵器作りにつながりました。大阪の陶邑須恵器すえむらはまだ発掘がされず、益子で同じ須恵器にめぐり合ったのでした。

彼は陶芸家の濱田庄司氏らとも交流はあったのですが、須恵器を焼く常滑の江崎一生氏の須恵器に学び、江崎風な須恵器を作っていましたが、富本憲吉氏の上絵付を須恵器に生かし、加守田須恵器を完成されました。

その後、岩手県遠野へ窯を移され、毎年新しい文様の作品を発表され、世界から注目される現代作家となりました。

岸和田のマドカホールオープン記念に加守田章二展が企画され、新米職員が全国より作品を集めました。しかし、岸和田の人は彼の偉大さに気づかず、図録を作る時に、何部作ったらよいかと私にたずねてられました。私はめったにない展示会なので三千部は作ったらと担当者にアドバイスはしたものの、千部程度刷ったにすぎません



彩色壺 1973年

でした。

また、あるとき、岸和田のある企業が、某骨董商から加守田作品をまとめて売りに出ているので買わないかと声をかけられましたが、価値がわからないからと断っておられました。

その後、東京の人が加守田さんの作品五十点を出身地の岸和田で買ってほしいとのことで、市が二億の予算をつけたそうです。議会にその価値を説明してほしいと依頼がありました。私は誰がその価値を判断するかで議会が認めるか否かが決まると思い、大阪市立東洋陶磁美術館の伊藤館長に、その価値判断をしてもらおうと交渉しました。館長は、古陶磁はわかるが、現代作家はわからないと、金沢美大の乾由明さんならどうかと言われました。岸和田が買わないなら私が買いましょうかとも言われました。乾さんの電話番号も教えていただいたのですが、忙しそうで会えず、仕方なく大阪美術クラブ会長の米田氏に値を付けていただいて教育長に渡しました。議会は通ったようですが、当時の原市長に対立していた議員が、東京の持ち主へ、岸和田には何の施設もない、美術館もないところへ売ったら死蔵になると横槍を入れてしまいました。原市長は自ら二度も東京に出向き、持ち主の方に購入を申し出ましたが、岸和田には売らぬと断られました。

今、岸和田にこの五十点もの作品があったら、加守田記念館が建ち、全国からファンが押し寄せたことでしょう。今、益子が加守田さんのメッカとなっています。出生地の岸和田でそれが実現できなかったのは、とても残念なことです。

写真提供：朝日新聞社 加守田章二展図録
株式会社 加守田章二全仕事

Cultural Hot Spot In Kishiwada

町単位で行う文化活動 「東ヶ丘美術愛好会」



むつみ会 中大路会長と美術愛好会 布野前会長

岸和田市と和泉市の境に位置する東ヶ丘町。岸和田市内でも比較的新しいこの町には「むつみ会」と呼ばれる老人クラブが設けられ、趣味やボランティアの集まりが盛んに活動を行っている。また、美術愛好家が集う有志の団体、「東ヶ丘美術愛好会」が存在し、創作活動を展開。ではなぜ、東ヶ丘町が文化の盛んな町になりえたのか。その点を河野自治会会長、中大路老人クラブ会長、布野東ヶ丘美術愛好会前会長（取材時：会長）らにお聞きした。

美術レベルの高い住民が集い結成

約40年前に誕生した東ヶ丘町は当初、趣味の豊かな住民が多かった。そして、年月を経るにしたがって増えてくるのが、定年退職などで時間に余裕ができた人たち。その中でも美術を愛好する人たちが集い、10年前に発足したのが「東ヶ丘美術愛好会」だ。

「町ぐるみで楽しみたいという思いがあって、立ち上げました」と話すのは前会長の布野定一さん。「東ヶ丘町内にはレベルの高い人が多く、参加してもらうには市展に出せる程度の腕前を持つ人に基準を合わせました」と発足当時の意気込みを語る。

その後、毎年春に旅行や親睦会を行い、秋には自泉会館で展示会を実施。2009年は10周年を記念して、9月にマドカホールで愛好会展を開催。洋画、染織、写真、日本画、書など、43名の作品129点を展示。710名の来場者があった。

活動内の作品ジャンルは市展なみ。発足時の会員数は22名で、現在34名。その中には個人で、大阪市長賞や大阪府知事賞の受賞者もいる。



2009年東ヶ丘美術愛好会の10周年記念展示風景(マドカホール)

文化を支える利便性の高い町会館

そんな文化的ムード漂う町である理由のひとつとして、「活動の場に関する利便性の高さも要因だと思います」と説明してくれたのは老人クラブ会長の中大路芳一さんと自治会長の河野明夫さん。「東ヶ丘の町会館は事務員を常駐させています。それまで会館を使おうとすると、管理者からカギを預かり、終わった後は掃除をして、カギをかけて、返しに行くという手間がありました。けれど、事務員を置くようになると手間が省かれ、簡単に利用が可能となり、稼働率も高まりました。」

つまり、関心の高い住民と、使い勝手のよい場所があってこそなした結果であり、他町の人からも、「ウチの町でも同じようなグループが欲しい」「講師になってくれるような人を派遣して欲しい」という相談を持ちかけられることがあるらしい。

現在、東ヶ丘町の住民数は770戸、2159人。しかし高齢者率が高く、全住民に対して65歳以上が占める割合は約37%。この現状に際して「住民の数も減少し、いつまで会が続くかわからない」と布野さん。「門戸を開放し、東ヶ丘町以外の人や若い人の参加も促す必要があるかもしれません」と打開策を考えている。

住民の意識と町内会の協力があって、文化意識の高い町となった東ヶ丘町。もちろん他の町でも実現は可能で、そのためのモデルとして、今後ますます注目を浴びるだろう。

岸和田城「八陣の庭」作庭家 重森三玲の作品展と講演会

- 作品展** <日 時> 2009年11月25日(水)～29日(日) 午前10時～午後5時
 <場 所> 自泉会館展示室
- 講演会** <日 時> 2009年11月28日(土) 午後2時～4時(「八陣の庭」見学会を含む)
 <場 所> 自泉会館ホール・岸和田城八陣の庭
 <講 師> 中田勝康氏 (庭園史研究家)



作品展には、大阪府下の市町村を始め、近畿2府4県だけではなく、東は東京や長野県、西は岡山県・広島県・愛媛県からも展示を見にきていただきました。

講演会では、やや肌寒い中、大勢の参加者を前に、講師の中田先生が重森三玲氏について時間を押してまで熱弁をふるってくださいました。講演会の後は、実際に「八陣の庭」を見学しました。

参加者より、「今まで何も知らずお城の庭を眺めていましたが、八陣の庭の素晴らしさを再認識しました」等の感想をいただきました。



第16回自泉フレッシュコンサート ～秋に想いをはせて～

- <日 時> 2009年10月31日(土) 午後6時半～
 <場 所> 自泉会館ホール
 <出演者> ピアノ：岡部 桂永子・岡村 星見
 トロンボーン：岸部 雅史・岩間 由・泉谷浩史



岡部さんは「舟歌OP60」を、ゆらゆらゴンドラに揺られるがごとく、さらに「ベルガマスク組曲」より「月の光」、「喜びの島」で美しいメロディーを聴かせてくださいました。

岡村さんは「ラ・カンパネラ」で聴衆を魅了し、その後の岡部さんのオリジナル、～岸和田の秋に寄せて～では、岸和田祭りを、引き出しから曳行が終わったあとの寂しさまで見事に表現してくださいました。

岸部さん、岩間さん、泉谷さんは「スリーコーラル」他を自泉では珍しいトロンボーン三重奏をお洒落なタッチで演奏してくださいました。

全体では客席と演奏者が一体になった、良いコンサートになりました。

岡本和子 オータムアフタヌーン コンサート

- <日 時> 2009年10月4日(日) 午後2時半～
 <場 所> 自泉会館ホール
 <出演者> 歌：岡本 和子 ピアノ伴奏：吉田 幸生

当日は雲ひとつない秋晴れにめぐまれ、第一部ではラテン(スペイン)、カンツオーネ(イタリア)を中心に歌っていただきました。岡本さんは大学を卒業後、会社勤めをされた後に本格的な歌の勉強を開始されたそうです。

コンサートの後半はCDアルバム「歌に生きる」に収録されている曲や、「枯葉」のようなシャンソンの代表作を披露してください、さらに「宵待草」、「千の風になって」など日本の曲も歌われました。

歌を愛する岡本さんの思いを感じたコンサートでした。



大阪パノラマ物語 in 岸和田

- <日 時> 2009年10月17日(土) 午後7時～
 <場 所> 自泉会館ホール
 <出演者> ぱんどらBOX

自泉会館ホールの準備を見て驚いた。エレキギター、ドラムセット、大きなアンプやスピーカー、いつものクラシック音楽との違いに思わず目を疑う。

さて、ステージが始まるとこれが面白い。大阪と岸和田の町、人をテーマにオリジナルソングと寸劇で表現していく。大阪のおばちゃんと同東からやってきた女の子の会話が通じない。話が

通じなくても無視して話すファンキーでおせっかいな大阪のおばちゃん。ロックのリズムと演奏がいい。寸劇のテクニクがきらりと光る。ダンスチームがステージを盛り上げる。

たまには自泉でこんな催しも楽しいなと思えるステージでした。



アカペラクリスマスコンサート

- <日 時> 2009年12月12日(土)
 午後2時～・午後6時半～(2回公演)
 <場 所> 自泉会館ホール
 <出演者> ダイナマイトしゃかりきサ～カス

クリスマスソングを中心に、女性3名と男性2名の美しいアカペラのハーモニーに自泉のホールが包まれました。また出演者がコミカルな会話で客席を楽しませてくれ、客席も手拍子でコンサートに参加し、楽しい時間を過ごしました。



岸和田文化事業協会の事業 Information

岸和田市共催事業

「紙ふうせん」 ハートフルコンサート



日時 平成22年1月30日(土)
午後2時開演・午後7時開演(2回公演)
場所 岸和田市立自泉会館ホール
出演者 紙ふうせん
入場料 一般前売3,500円 会員前売3,000円
(当日300円増) ※手話コーラス付

岸和田市共催事業

チェンバロを 見て触れてみよう!



日時 平成22年2月21日(日)午後3時開演
場所 岸和田市立自泉会館ホール
出演者 河野まり子
入場料 一般前売大人2,000円
会員前売大人1,500円
子ども前売 1,000円 ※子ども=小学生以下
(当日300円増)

岸和田市共催事業

第3回フレッシュプレミアムコンサート 未来へ～ここから～

日時 平成22年3月20日(土) 午後5時開演
場所 マドカホール(岸和田市立文化会館)
出演者 岩崎 友美・岡村 星見・寺田 江里子・仲山 知美・西川 寛子・堀内 望未
柴田 誠巳・橋本 江梨
入場料 一般前売1,000円 (当日200円増)

■お問い合わせ 岸和田文化事業協会事務局まで TEL/FAX 072-437-3801 Eメール fontaine@sensyu.ne.jp

平成22年度(平成22年4月～平成23年3月)

会員募集

「岸和田文化事業協会」は、文化・芸術の発展をめざして活動する市民文化団体です。鑑賞や参加だけでなく、創造、発表、企画、情報発信、提言など自らのネットワークを活用して「地域の文化環境」づくりに貢献することを目的にしています。文化・芸術を愛し、会の趣旨に賛同される方はどなたでも入会できます。岸和田市在住以外の方も歓迎いたします。

年会費(入会費不要)

個人会員(1口)	2,000円	団体会員(1口)	5,000円
家族会員(1口)	1,000円	法人会員(1口)	10,000円
(個人会員の同居家族)		特別会員(1口)	50,000円

入会方法 協会事務局(自泉会館)で直接受付致します。
郵便振込の場合は
口座番号 00970-9-28145
加入者名 岸和田文化事業協会

詳しくは、岸和田文化事業協会事務局まで。
TEL/FAX 072-437-3801
Eメール fontaine@sensyu.ne.jp

nouvelle Fontaine vol.26

発行:岸和田文化事業協会
発行日:2010年1月15日

◆事務局
〒596-0073
岸和田市岸城町5-10 岸和田市立自泉会館内
TEL/FAX 072-437-3801
Eメール fontaine@sensyu.ne.jp

◆編集委員 和田正則・紙野陽子・歯黒猛夫
藤田保平・本郷元子

編集後記...

新年明けましておめでとうございます。今年こそ平和な良い年でありませうように。

多くの国や地域が戦争や紛争に明け暮れています。

そんな中で、文化活動団体の機関紙の制作に携われるとは何と幸せなことかと改めて感じます。様々な分野での創作・制作活動が出来、またその結果を享受出来るのは、先ず平和という基礎がなくては成り立ちません。誰もが安全に暮らし、文化を享受できる世界に一步でも近づくと願います。

文化事業協会の活動の支えになるFontaineであるよう背筋を伸ばして襟を正して…

この度、当協会のホームページが新しくなりました。この中にFontaineも入れております。ぜひご覧ください。(本郷)

<http://www2.sensyu.ne.jp/fontaine/> 岸和田文化事業協会 検索